言葉の力と「生きる」ことの意味
―日本語の再定義を求めて

日本語をもういちど定義し直すこと、これが、近代の果て、大転換の時代に求められている――それが、二〇一一年の二つの大きな出来事・東京電力福島原発事故の惨禍と『古典基礎語辞典』（大野晋）の出版が指し示したことだった。

はじめに

私は日本主義とは次のことであると考える。この日本列島弧や琉球列島弧で、言葉をつむぎ命をつないで、縄文時代からでも一万五千年にわたって、人々は生活してきた。その暮らしのなかで形づくられてきた生きるかたちとそのことわり、それを後に定義するように里のことわりというが、それを自覚的に取り出し、それに学びそれを人生の土台として、今日の転換期を生きようとする立場である。

そのための基礎作業として、日本語の再定義という問題を考えたい。

考える力の衰退

私はながく高校生に数学を教えてきた。そして「わかって、にっこり」が授業の原点であると生徒たちから教えられた。人は「ああ、そうか」とわかればにっこりし、その人自身が変わる。そこに喜びがある。この経験を得る場こそ授業の場である。

教育とは、その子のうちにある力を引き出し、人そのものを育てることである。一人一人の人間を開花させる。そうして現れた人間のさまざまな力は、けっして個人の私有物ではない。どんな力も、多くの人々に囲まれ育まれてはじめて開花する。育まれた自らの力は、育ててくれたこの世間に返さなければならない。こうして人を育て、人に支えられる世でなければならない。

この立場で高校生に接し痛感するのは、言葉の力の衰えである。言葉とは、存在を分節してつかむことであり、同時に、考えることそのものであり、それをまとめ、話し書いてゆくことである。この力がおしなべて弱い。何度も何度もこの事実に出会ってきた。

考える力の衰退という現実に出会うことで、自分自身が

高校時代、現代日本語への違和感を強くもってきたことに改めて気づいた。その頃読んだ哲学の本の中に「思考する」という言葉が何度も出てきた。しかし高校生の自分には「思考する」とはどのように頭を働かせることなのか分からなかった。「思う」は分かる。「考える」も分かる。だが「思考する」は分からなかった。高校生の私は「思う」と「考える」は別の言葉だと考えていた。

私のことをほんとうに思っているの。

そうだよ。

なら、もっとしっかり考えてよ。

この対話は、思うことがただちに考えることではないことと、本当に思うのなら考えるはずだ、ということを意味している。別の言葉だからこそ、この使い分けができる。

ところが近代日本語は、これをそのまま繋いで「思考する」という言葉を作った。これは英語の「think」等の翻訳に用いるための漢字造語であって、それまで用いてきた日本語に根ざした言葉ではない。

かつてドイツに留学した日本の哲学徒の部屋の掃除に来たメードが、窓をあけるときに「aufheben」と言った。「aufheben」はヘーゲル哲学の基礎概念で「止揚する」と訳している。それで「ドイツではメードまでこんな哲学語を使うのか」と感心したという話がある。しかしこれは逆で「aufheben」は誰もが使う日常語なのだ。それを抽象して基幹の言葉に育てたのがヘーゲルなのだ。

ドイツに学ぶのなら、何よりこのような日常語と哲学語の関係をこそ学ぶべきであった。だが、近代日本は、西洋の知の肝心なところは学ばず、結果のみを漢字語を作って移入した。ここに近代日本語の基本問題がある。

このような近代日本語のあり方にこそ、高校生の考える力が弱い根源がある。ここを何とかしていかなければ、高校生の言葉の力が衰える一方である。それどころか、日本語は次の時代には人間の言葉としての役割を果たせないのではないか。このことに思い至った。

ならばこの問題をほりさげて考えねばならない。これは言葉の専門家や教育にかかわるものだけの問題ではない。言葉の意味を自覚して問い、そして言葉をいつくしむことが、一人一人の日常の営みとして根づかなければならない。そういう文化でなければならない。そうなら、言葉の素人が言葉に向きあうことには意味がある。これが私が言葉にかかわる根拠であった。

人間と言葉

人間は音節のある言葉をもつ。そして言葉によって協働して命をつなぐ生命である。人をして人としている言葉、それをその人の「固有の言葉」と言おう。ここで言う「言葉」は、「日本語」というように全体を示すときも、個々の

いわゆる単語や文などを示すときもある。あえて同じ「言葉」という言葉で表す。それは、言葉の立ち現れる場を大切にし、現れるものを言葉と表すからである。

ではこの日本語を、もういちど人間の言葉として甦らせるための基礎作業は何か。

第一は、基本的な言葉の再定義である。これを経なければ立ちかえるべき根拠から考えることができなくなってゆくからである。言葉は、言葉の構造を支える根のある言葉から、必要な言葉を定義してゆかなければならない。しかし近代日本語はそのようにはなされなかった。その結果、いわゆることわりの言葉が高校生にとって内からの言葉となりがたく、納得した論証を構築することができない。

第二は、一万五千年以上前にさかのぼる縄文文明、三千年前にはじまる弥生文明、その混成語として形成されてきた日本語は、言葉としての構造と、その構造によって支えられるものの見方考え方をもっている。再定義を通してそれを自覚的に取り出してゆく。

時代は近代日本語の見直しを求めている

日本語をもういちど定義し、大転換の時代をに日本語とその言葉で生きる人々が甦る。それが、近代の果てにおいて、いま歴史が求めることである。とりわけ次の二つの事実がそれを鮮明にしている。

第一は、二〇一一年三月の東京電力福島原子力発電所核惨事である。これは近代日本の結末として起こった惨事であり、今後ますます惨事であることが明確となることであった。この核惨事は、日本語のことわりと断絶した近代漢字造語に支えられた日本国の官僚制を中心とする無責任体制が生みだしたものであった。これをのりこえるためには、近代日本語をこの核惨事という経験を通して再点検し再構成することが不可欠だからである。

第二に、同じ二〇一一年十月『古典基礎語辞典』が発刊された。編集者の故大野晋先生は、弥生時代の日本語は、タミル語が縄文時代の言葉と出会って形成されたものであることを明らかにされた。日本語と日本列島弧の文明が、いかに深くタミル語とそれとともにもたらされた水田耕作稲作技術に依拠しているかという事実は、歴史的真理である。『古典基礎語辞典』がこの東電核惨事の後に世に出たことは、偶然とはいえ、そこに大きな歴史的必然性を見出すことが出来る。

以上である。かくして、東電核惨事にいたる近代の経験を、『古典基礎語辞典』に照らしあわせ、それによって日本語を再定義することが課題となった。

言葉を定義するというのは、人生の経験として学んだ言葉の意味や意義を、辞書を通して古人の用法と照らしあわせたうえで、もういちど自分の言葉で書き直すことである。これを、言葉を拓き耕すことと言おう。一つ一つの言

葉を味わい、相互にその意味を書き定めてゆく。そして、どんなことも、みずから納得できるまでその根拠を問う。これが、言葉を拓き耕す営みである。

日本語の構造を定める言葉

まず「構造」の意味を定めなければならない。

「構」とは「かまえ」であり、「造」とは「つくり」である。すなわち、そのものの現れかた（型）と、そのもののつくられかた（方）である。いずれの「かた」も「こと」であり、「もの」の二つの側面としての「こと」が、構造の意味である。

日本語の構造というとき、まず日本語としてとらえた言葉の全体がある。そして言葉の構造とは、その言葉のかまえとつくりとして、考えられる。

日本語は「てにをは」に集約されるいわゆる「辞」と、ものに対応してそれを分節する言葉としての「詞」からできている。「辞」は文の構造を定める言葉であり、「詞」はそれぞれ意味をもち、「辞」と合わせて文の意味を定める。「辞」も「詞」も「ことば」と訓じる。

日本語の仕組みは、「辞」といくつかの基本的な「詞」によって定まる。それらは日本語の構造を規定する言葉である。それで、それらの言葉を構造の言葉という。同時に構造の言葉は、世界をどのような枠組でつかむかを定める。世界を分節して切り取るうえで基本となる言葉である。

ひとつひとつの言葉は、言葉の構造のなかに位置をもち、その諸関係ではじめて意味が定まる。言葉の意味は、その構造上の位置を基本にして、さらにその言葉にこめられた人間の経験によって深められる。こうして言葉は豊かになってゆく。

構造の言葉が言葉の土台である。この土台に長い歴史のなかで積みあげられてきた人間の智慧が蓄えられている。人間は、日常の言葉を抽象し洗練し結晶させて新たな言葉を生み出し思想を組み立てる。そうでなければ、つまり構造語からくみ上げられた思想でなければ、言葉の力はない。

構造と無縁に翻訳のためにつくられたり、外国語をそのまま音で写した単語や言い回しはその位置を構造の中にもつことはできない。つまりはその意味を定めることができない。すべての新たな単語や言い回しは、構造によって規定されている基本的な言葉から定義され、新たな位置を持ち意味が定められなければ、明確な言葉とはなりえない。

近代日本語は言葉を内部から定めなかった。翻訳のために漢字語を作り出し、最終的な意味の定義は外国語に求めて終わりにし、それも面倒になればカタカナや横文字を中にはめ込んで済ますことで、固有の言葉を育てなかった。

漢字には、長い漢字文明の歴史がある。日本語は、縄文の時代も弥生の時代も、ながく文字をもたず、漢字文明と

は離れて熟成してきた。だからまた、日本語にとっては音読みした漢字語もまた内在のものではない。そのままでは異物である。

同じ異物なら音訳の洋語のほうが簡明だし見栄えがする、それが今の流れである。学術から思想、政治、そして日常の言葉まで、この風潮が一般的になっている。

やまとことば

日本語の「構造の言葉」はいわゆる「やまとことば」と重なる部分がある。「やまとことば」と言われる言葉を含む。ではなぜ「やまとことば」と言わないのか。理由は二つある。

第一、「やまとことば」という言葉には、「日本の古来の言葉」「本来の日本語」という考え方がある。しかしそのような言葉の存在は仮説でしかない。「本来の日本語」があるわけではない。現在の日本語総体のなかでの相互関係においてより基本的かどうかということのみがある。

「やまとことば」という考え方からは自由に、世界の構造を切りとる言葉であり、日本語の構造を定める言葉という意味で「構造日本語」という考え方をする。従来やまとことばとしてとらえられてきた語群を含む基本語を、構造日本語としてとらえ直し再定義する。

第二、構造日本語は生きたものである。日本語を固有の言葉とするものが現代日本語と向きあい吟味し日本語のなかでの構造的な位置づけを確定していくことによって、その言葉は新たに構造日本語に加わる。「やまとことば」は固定されている。経験によって言葉を再定義し、骨格となる言葉を広げ深めていく。そのような運動過程によって変化していく基本語、これが構造日本語である。

定義は言葉のいのち

日本語の構造を定め、また構造から定義される基本語、つまり構造語について、構造から定義されるそのことを、基本語相互の関係としてつかみなおす。それを言葉の内在的定義という。

言葉の意味を「本来の日本語」とかあるいは「農業協同体の言葉」とか現代日本語の外に帰結させない。外在的説明は必要に応じて述べるが、定義を文明論に置き換えることはできない。語源もまた本質的ではない。また、縄文語やあるいはタミル語に由来するかどうかも本質的ではない。それらはあくまで再定義の営みにおける参考資料である。この資料は重視するが、本質ではない。

言葉は生きている。言葉の意味を深く構造から再定義してゆくこと自体が言葉のはたらきである。構造語の定義は現在の日本語に対してなされる。現在の日本語をその構造と意味において問うことによって構造と意味を吟味し再定

義する。固有の言葉によって固有の言葉を対象化してゆく営みそのものである。

世界は固有の文化がともに輝く深い普遍の場をめざす。その場こそ文明の新しい段階である。西洋に端を発する近代文明は自らを乗り越え、新しい世界文明にならなければならない。多極化を経て、そのうえで極を超えて、新しい人類的な場としての文明に至らざるを得ない。

この一大転換期、これが現代である。しかしこの転換は言うは易く為すは難いことこのうえなく、すべては未だ可能性に過ぎない。にもかかわらずこの転換は必然である。固有の言葉の再訓はこの転換の時代に不可欠である。

日本語の来歴

これを考える前提として、そもそもこの日本語はどのような歴史の言葉なのか。ここでそれを再確認したい。

一万五千年前にはじまる縄文時代は、モンゴロイド系を基礎に各地に三内丸山遺跡のように文明が成立していた。そして、黒曜石の分布に見られるように交易もまた盛んであり、東アジアの大陸沿岸沿いに、遠くインド大陸におよんでいた。

紀元前一千年頃のアーリア人のインド大陸進出によってドラビダ人が拡散し日本列島にも至った。水田耕作と鉄器がタミル人によってもたらされた。多くの今に連なる言葉もまたもたらされた。こうして弥生の文明が始まった。

この言葉が縄文語と混成する。その過程のなかに、紀元前の数百年、揚子江沿岸部の呉や越から、日本列島へ幾重にも海の民の移住がおこなわれ、小国家を形成した。そして混成語としての日本語が熟成した。

このうえにさらに一～六世紀にかけて、漢の後の中国大陸の動乱にあわせて遼東半島や朝鮮半島から新たな支配者、天皇家の祖先に連なる人々、あるいは邪馬台国のようにまた別の系統の人々が移住した。彼らは黄河文明とのつながりをもつ大陸文明の人であった。

縄文の言葉と弥生の言葉が出会い熟成して一つの混成語を生みだすのに千年以上のときが必要だった。平安の時代から再び千年の時をへて江戸末から明治期の西洋との出会いである。そこで近代日本語の試行錯誤と苦しみがはじまる。近代日本語の前提として、このような混成と熟成のときがあったことをおさえておかねばならない。

近代の漢字造語によって、このような歴史ある言葉の生きた力が覆い隠されてしまった。その果てに東大話法といわれる官僚言葉がある。そしてついに東電核惨事に至った。

里のことわり

であるから、ここからの活路を求めるものは、塗り込められ封じ込められた日本語のいのちを解きはなち、現代に

甦らせることを基礎にしなければならない。この観点から、いくつかの言葉を吟味したい。

日本列島の歴史を踏まえ、今日ここに住むものの生き方を考えてゆくためには、ながくこの列島弧に住み、その風土とともに育んできたものの見方、考え方を、もういちど取り出し、時代に応じてそれを深めなければならない。そのようなわれわれの人生観やものの見方、考え方を「里のことわり」と言おう。その骨格をなす言葉を、ここで取りあげよう。

さと

まず里を改めて定義する。「さと（里）」は接頭語の「さ」と「ところ」を表す「と」よりなる。「さ」は「さつき（皐月）」、「さおとめ（早乙女）」、「さなえ（早苗）」、「さみだれ（五月雨）」の「さ」であり、みずみずしいいのちの満ちていることを表す。「と」は「やまと（山の霊威があらわれるところ）」、「みなと（水の霊威があらわれるところ）」のように場を表す。

「さと」はいのちの霊威があらわれるところをいう。つまり、人が生まれ育ち、生活し、いのちをつなぐところの意である。後にそこを出た者は、育った里を、心の拠り所として「ふるさと（古里、故郷）」という。「こと―わり」の意味は、「こと」の意味を考えたうえで後で定義する。ここでは、里につたえられそこに住むものの生き方、その形そしてその仕組みを表すものとする。

里のことわりを慈しみ、それを今に生かす。この心が世の在り方を変えてゆく力であり、この心を欠くならば、何ごとをなさんとしてもそれは根なし草である。

もの

宇宙空間としての「ま（間）」と、大地としての「な（地）」、つまり「まな」、これが世界である。この「まな」は「もの」からなる。「もの」があることで「まな」がある。

「ひと」は「もの」の「こと」を「かたる」が、「もの」そのものを変えることはできない。ものは、ひとのちからでかえられない定めであり、きまりの根拠である。

この言葉は、タミル語 man に起源をもつ。タミル語は世の定めや決まりという意味である。それが縄文語と混成するなかで熟成した。

「もの」は変えることのできない定めであり、人の世の定めまですべてをつつむ。定め、きまりの意味のタミル語が、熟成し、意味が深まり、定めやきまりの根拠として、人が見ることができるすべてのものを「もの」という。さらに思いをかけるすべてのものを「もの」という。見たり思ったりするその視線にあるものが、「もの」である。

「もの」を「もの」としてとらえるのは、「見る」働き、

あるいは「思う」働きである。そして見たもののことを言葉で切り取る、つまり考える。逆にこの認知作用が成立するものすべてが「もの」である。これが第一義である。

諸々のことが生起する土台にある「もの」は、人の力の外にあり人が変えることはできない。ここから既定の事実、避けがたいさだめ、さまざまの規範などを表す。しかしまた「もの」は人に対して無関係に存在するのではなく、逆に人との関係においてつかまれ、人をひきつけるとともに、ひきつけてはなさない力のある存在である。これが第二義である。

「もの」は、物と心を切り離す二元論の「物」とは異なり、「思い」と切り離されない。「もの」はそのものへの「思い」を引き起こし、見る者のいのちに関わる力あるものとしてとらえられる。つまり「もの」は人に働きかける。もの自体が人が恐怖し畏怖する対象となる。この意義を吟味し、ここに蓄えられた先人の智慧に注目しよう。

「もの」は確かにある。見たり思ったりすることができるものが「もの」である。すべてものは人と係わり、人と係わる一切がものである。ものとは思いをよせる方にあるすべてのものをいう。「もの」を「もの」としてとらえるのは、まず「見る」働き、あるいは「思う」働きである。そして見たものを言葉に切り取り名づける。逆にこの認知の営みが成立するすべてのものが「もの」である。思うことによってものとして切り取られ名づけられてものが成立する。これがものである。

ものはそれ自体で存在している。人がものに思いをかけ、もののことを考えるのはなぜ可能か。それはそこに、ものが確かにに存在しているからである。それがものである。そのものは、諸々のことが生起する土台にあり、人の力の外にあり、存在をなくすることはできない。

ものはもの自身の力で動いている。であるがゆえに、人がものを思うのは、実はものにひきつけられてはじめて起こる。ものは人間をつかむ。ひきつけてはなさない力のある存在である。

こと

「もの」の「かた」を「こと」という。

世界としての「まな」は「もの」からなる。「まな」を「つくる」その「かた」が「こと」である。ひとはそれを「こと」としてとらえ、言葉をつける。

ものの集まりが一つの型として括られるとき、その括られたまとまりをひとは「こと」としてつかむ。《無秩序であった》もののなかに意味を見出し、一つの「かた（型）」にとらえるとき、そのかたを分節した言葉を「こと」という。これが「こと」の原義である。

この言葉は、タミル語 katan に起源をもつ。定めや義務という意味である。それが熟成した。

「こと」は日本語でもっとも基本になる言葉で、その意味は深く大きい。人にとってこの世は、動き、生き、響きあい、輝き、生まれ死に、興り滅びしている。それを人は「こと」のはたらきとしてつかむ。「こと」は、人が自らの諸活動と自らが生きる場所に生起する内容をつかもうとするとき、のべられる言葉である。

「こと」そのものは言葉にならない。山の光景にわれを忘れ、職人が制作に没頭し全精神を傾けて仕事に打ち込んでいるとき、人は「こと」のうちにある。そしてわれにかえり反省が生まれる。そのとき、体験したことを言葉にする。直接の出会いから「こと」を経て、概念の把握へ転化する。事実としての存在が本質としての存在に転化する。

つまり「こと」は、「こと（の）は（端、葉）」としての「言葉」に現実化する。「は」は言葉を意味するタミル語 vay に由来する。「こと」それ自体は、「言葉」ではない。「言葉」は「こと」の現実の形であって「こと」そのものではない。「こと」は「言葉」が成立する土台であり、「言葉」につかまれる以前の本質を指し示す（指し示そうとする）言葉である。

「くち」の古形「くつ」のかたる内容が「こと」である。

「くつ」は「くつわ［くつ（口）わ（輪）］の意」に残っている。ことばになることによって、無秩序なものがまとまり「こと」が成立する。では「うちなあぐち（沖縄語）」というように「くち」は言葉の意味である。

「もの」の世界に意味を見いだし、これを一つの「こと」としてつかむ。このとき、「こと」として「つかむ」「私」が確立する。また、「こととしてつかむ」ときに、意味を成立させる「とき」が生まれる。「時」の成立である。「こと」としてつかまれた内容は、人には「時間的に経過する一連の出来事」として意識される。そのように統括してつかむ作用が人間の認知行為である。

「もの」と「こと」は取り違えることなく使われる。意味をいちいち判断して使うのではなく、発話者の意図と言葉が一体になっているから「もの」「こと」は正しく使われる。日本語の構造と言葉の意識が一体になっている。「もの」の世界を一つの「こと」としてつかむのは人の認知作用の根幹である。言葉というもののはたらきそのものを言葉にした言葉が「こと」である。

「こと」は事実の発見の意識を表現し、「もの」は個人の力の及ばないものの存在を表現している。「もの」が世界を「見る」ことによって切りとられるのに対して、「こと」は世界に耳を傾け「きく（聞く、聴く）」ことによって言葉としてつかまれる。

ことわり

こと（言）をわる（割る）ことにより明らかとなること。ことをわって人が知ったそのもののこと。ことをわって開

かれたより深いこと。これがことわりである。

「こと」は、生々流転する世界を一つのまとまりで切り取りつかむ作用によって得られる内容そのものであり、したがって「ことわり」は、つかんだ「ものの道理」、ものに内在する道理を意味する。ものは人の意のままにはならない存在であるがゆえに、ことわりは人の力では支配し動かすことのできない条理、すじ道、も意味する。

ことを割ることは人間が生きてゆくことそのものである。生きてゆくことはいずれにせよ一つ一つの困難と向きあっていくことである。「もの」としてとらえられた人生の厳格さを聴きとり、それを自己の生き方に表す、それが「ことを割る」ことである。人生とはことわりの人生だということもまた、人生の厳格さである。

世界はいきいきと輝き運動を続けている。人間もまたこの世界のなかでいっとき輝きそして生を終えてものにかえる。そのいっときを「いのちある」ときという。いのちあるとき、それを生きるという。人が生きる内実は、「こと」の内に入って「こと」をつかみ、人生を動かしていくことである。この営みを「ことをわる」という。人生とは「ことをわる」営みそのものである。里はことをわるところであり、ことわりの智恵をつたえるところでもある。

「ことわり」は「ことわるまでもないことだが」のような用法を仲立ちにして、拒絶するという意味まで拡がった。家や村やなどの内で「こと」を荒立てることは、日常生活の流れを断ちきることであった。それがつまり「ことをわる」ことであり、日常生活を「断る」ことであった。協働の場の慣習的な任務に異議を唱えることが「ことわり」であり、したがって日常生活を「断つ」ことを意味する漢字が当てられた。

人のいのちのいとなみそれ自身が「ことわり」であり、さらにそのうえでの「語らい」である。人が生きるということは何かしら「こと」を荒立てることなのである。

対の言葉

「ものがなる」のであり、「ことをする」のである。「ものを思う」のであり、「ことを考える」のである。このように、対になった言葉が日本語の骨格をつくっている。ここまできて、私の高校時代の問題を考えることができる

おもう（思う）

ものにひきつけられ、心がそのものの上によることを「おもう（思う）」という。ものに思いをよせ、そのもののことを考える。思うとき、考え、ことが生まれる。思うと考えるは二つではじめて、まことの心の働きとなる。

「おもう」は「うむ（生む）」から転じたことばであり、「生む」ことが起こる根拠となる行為という意味である。

タミル語 omp-u（熟考する、心を集中する）に由来する。

思うことは創造の源である。その思う行為がなぜ生じるか。それは「ものが人を惹きつける」からである。ものが人を惹きつけとらえるとき、人はものを思う。惹きつけられているその人の心のあり方、つまり、惹きつけられた状態の人の意識とその内容を「思い」という。

思うは、具体的には、自己の内に、恋・思慕・恨み・感慨・望み・想像・執念・予想・心配などをじっと避けがたくもっていることになる。思うことは単にある感情などを持つということではない。「思うことが避けられない」、「思わずにはいられない」というところに「思う」という言葉の意味がある。

「もの」と心はこのように互いに交感し響きあっている。これが「思う」がとらえる世界である。「思い」は「思う」の連用形の名詞化として「思う」という心の働き、また「思う」内容を表す。人の力ではどうしようもなくて「思わずにはいられない」ことが本質的な意味である。人の内部に生まれたその「思い」は、これをそのままじっと心中に置けば「思い」のままである。

かんがえる（考える）

古形は「かむがふ」であり、「かむ」は、「かみ（神）」を根拠に協同体を「結ぶ」ことであり、「がふ」は「向かう」の意味。つまりは協同体を結ぶ場で「向かう」ことである。「かむ」はタミル語 kamu に由来する。

その「かみ（神）」の「か」は「ありか」や「すみか」の「か」と同じく人が働く根拠としての場と、それを成り立たせている（結ぶ）もの、つまり協同体をまとめるはたらきそのもの、これが「かみ」の基層の意味である。

こうして、二つ揃って真とする日本語のなかで、「考える」は「思う」を対の言葉として熟成した。

ものとものとをつきあわせ、もののことをわる（分析・判断する）こと。「考える」ことは次の三つの段階の総体である。

第一に、この世界のある範囲のものの集まりを一つの「こと」としてとらえる。第二に、「こと」としてつかんだ中にあるものとものをつきあわせ、その関係を調べる。第三に、「こと」の仕組み、つまりことの内部の構造を知る。「考える」の連用形の名詞化として「考え」は、考えた結果の内容を表す。

「思う」と「考える」は別の言葉であり、そのうえで、「思う」と「考える」の二つがそろってはじめて「真（ま）」となる。一方を欠いては真ではありえない。これが日本語のことわりである。

いきといのち

「いき」は「おき」の母音交換形。「おき」は「おく（起

く）」の根拠である。ものがおきるのがいきのはたらき。ものがおきるのはそれが生きているからである。

「いのち」の根源を「いき」という。これが「生き」と「息」に分かれた。「生きる」は「いき」がはたらく状態に「いる」ことである。いのちをいのちとするこの根元的な働きがいきである。

いのちの「い」は食べ物。「の」の動作形は「ぬ」で大地（「な」）からものを得ること。つまり「いぬ」は生きるうえでの糧を得ることであり、その行為がなされる場であり、またその行為の主も表す。このように［in］は「いね（稲）」、「いのち（命）」、「いのり（祈り）」などに共通の不変部。「ち」は「霊（ち）」とも書かれ、手の行為を起こさせる大元を示している。

ものが糧を得て生成発展することが、生きるということであり、このときそのもののことを「いきもの」という。いきることの根拠としてのはたらき、それがいのちである。

いのちはものの一つの存在形式。「もの」が「いき」により「いきもの」となる。そのことを「いのち」という。「もの」が「いき」を根幹にして「もの―こと―いき」の三位一体構造において存在するとき、この存在を「いのち」という。

「いのちある」というその「いのち」そのものはことばにならない。世界が、動き、生き、響きあい、輝き、生まれ死に、興り滅びしている。それはいのちの発現である。人間がいのちあるのもまたいのちの発現である。人間が生まれ、そして帰っていく大元であり、人間にさちを贈る大元でもある。

いのちは深い。いのちの発現は、つねに、ことをわるはたらきという形でおこなわれる。それが人間の存在の基本構造である。

人のいのちがはたらくとき、そのところで、ことは言葉となる。いのちは、ときであり、世界の輝きであり、世界の意味である。ものはたがいにことわりをやりとりしている。つまり、ともにはたらく場において「ことわりあう」。「語りあい」、「語らい」である。ものが語らう、これが世界である。ものが語らい響きあうとき、そのことそのものとしてことわりはひらかれる。

ものの内部の語らい、もののあいだの語らい、この語らいこそが内部からことを明らかにする。語らうことによってものはより高くまた広いところに立つ。問題自身のなかから解決の道を見いだすことができる。人もまた、語らいによって、独りよがりな思いこみから解放される。語らいこそ世界を動かすちからである。

ひと

「ひと」の「ひ」は「ひ（霊）」とおなじ。「と」は「と（処）」、つまり場所を意味する。「ひと」はいのちの根拠で

ある「ひ（霊）」がとどまるところ。これが日本語が人間をつかんだ原初の形である。

この世界を生成するいのちの根拠がこの世界に現れるあり方。それが人である。近代にいたり、労働し言語をもつ生命として人が「人間」として再発見された。そして今日、近代の人間そのものが問われている。

人が生きてはたらくことは、ものとひととのことわりあいそのものであり、世界との語らいである。人がこの世界で一定のあいだ生きること自体、ことわりである。いのちあるものとしての人は世界からものを受けとり生きる。それがはたらくということである。直接のもののやりとり、つまり直接生産のはたらきこそ、いのちの根元的なはたらきであり、その場でこそもっともいのちが響きあい輝く。人と人はことをわりあい力をあわせてはたらく。つまり、人は語らい協同してはたらく、つまり協働することで人になる。

ひとは資源ではない

今日、日本では「人的資源」という言葉が用いられる。中央教育審議会は一九七〇年代「人的資源の開発」を言いはじめ、それが今日に続いている。「人的資源」とは生産活動に必要な労働力ということである。人を人として育てる教育から、人を資源として使えるようにする教育への転換がはかられてきた。教育を生産活動の一部とする考え方が表面化する。

もとより近代の学校制度は、産業技術を習得した人の育成を目的にしている。その時代の文明とそれを支える技術を習得することは必要である。人が何らかの生産につながることは、人の存在条件そのものである。だから仕事を求める人すべてに仕事を保障する。それは人の尊厳を尊重するということだ。

「人的資源」という考え方がいきわたることで、この関係は逆転させられ、正面から人間は「資源」であるという主張が行われはじめた。

しかし、人間は資源ではない。人そのものとして、まじめに働き、ものを大切にし、隣人同僚、生きとし生きるもの、たがいに助けあって生きてゆく。それが里のことわりの教える人のあり方である。経済は人間にとって目的ではない。あくまで方法である。

現実にも、経済を第一とする世のあり方に対し、協働の力で人を第一とする世を求める動きは、ますます深く広がっている。経済原理から人間原理へ、世界はいま大きな転換期の黎明期にある。

たみ

「たみ（民）」の語る言葉こそが本当の「こと」である。

つまり「まこと（真言）」である。その根拠は「民」が働く人であり、実際に自然と交わる人であり、人間が存在する形そのものだからである。「たみ」は万葉集にも出る古い言葉であるが、「田―人（臣）」「た―おみ」から来ているのではないかと考えられる。田で働くものをいう言葉である。

「田」とは何か。「た」は「たから（宝）」、「たかい（高い）」、「たかい（貴い）」などとともに、「たか」を共通にする。「たか」は「得難い立派な」を意味した。「田んぼ」は泥田、水田を指す。紀元前九～十世紀の頃、タミル人が日本列島にもちこんだ技術である。稲作そのものは縄文時代から行われていた。タミル人がもちこんだのは技術としての水田耕作である。栽培された稲そのものは在来種であったかも知れない。水田でない耕作地は「はた（畑）」というが、後に「田」は乾田も意味するようになった。

「たがやす（耕す）」は、「もの」のできる「場」である「田」を「返す」ことによって、ものがなるようにすることである。「たかへす」が古形、「田を返す」から来る。作物を作るために田畑を掘り起こし、すき返して土を柔らかにする。

人間の営みとは、場を耕すことによってものが成るようにすることである。人間は「もの」を直接には作らない。「田」を返すことによって豊に「なる」ようにする。「耕す・人」と「場の・田」とそして「そこになる・もの」の三者の相互関係が労働、ひいては人間の営みの基本的な型である。民とは「耕す人」である。それは、言葉を通した協働によってなされてきた。

このような人間の基本的なあり方が、日本語の構造のなかに映し出されている。

生活のなかで言葉の意味を問うこと

以上でもっとも基本的な言葉を再定義した。ことばを取り出し、もういちどその意味を考える。このような営みが、人々の日々の生活の一部となることを願っている。そのような文化が根づくことが、この転換の時代の内実であらねばならない。

言葉において深く根づく人々こそ、言葉をこえて結ばれる。日本語のことわりにおいて考え、生きんとするものがいるかぎり、希望はある。新たな世の形ができるまでには、さらに困難な段階を踏まねばならない。だがそこに人間の再生がある。日本近代百五十年の苦悩は新しい時代の肥やしであり糧であり、新しい時代の深い普遍の礎である。

私は以上のように考え、定義を積みあげてきた。その跡は、青空学園におかれた「日本語定義集」（この語で検索）を見られたい。現在およそ、百五十語を再定義している。